セブ島に学ぶ

東洋大国際地域学部研修から

＊3＊

報告者
国際地域学科・2年 興梠（こおろぎ） 美樹
国際観光学科・2年 若林 奈々絵

興梠美樹さん

若林奈々絵さん

貧困改善のモデルに

政府支援で医療提供

セブ研修の主目的の1つに、バランガイ・ルスでの調査がありました。今回は、このバランガイ・ルスについて報告します。「バランガイ」とは集落を意味する言葉ですが、現在では行政単位を指しており、セブ市には80あります。もともとの意味は、タガログ語の「小船」です。人々が船に乗ってやってきて陸地にたどり着く。そして集落を形成する。そういったイメージの、海と島の国であるフィリピンらしい言葉です。

わたしたちは、セブのバランガイの1つのバランガイ・ルスを訪れ、スラムの生活について調査しました。

「バランガイ」

このスラムの起源は、1956年4月の大火事です。このときに不法に住んでいたスラム地区から焼けだされ、ホームレスとなった住民がたくさん出ました。彼らのために、大統領の支援を受けたセブ市長の尽力で、バラックが作られました。この一画が、大統領夫人の名前「ルス」をとってバランガイ・ルスと名づけられ、次第に周囲に広がって、広大なスラム地区となりました。現在、20平方キロに1万5000人が住んでいます。バランガイのさらに下の行政単位を「シティオ」と呼び、ルスには16のシティオがあります。これらは、住民たちが以前住んでいたスラムの名称をそのまま付けたものです。

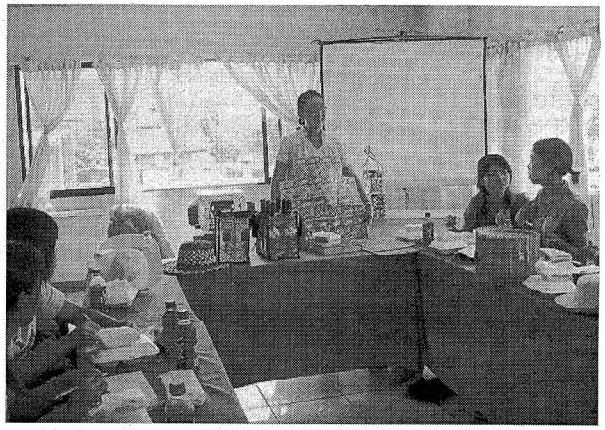
バランガイ・ルス内の通り。正面にセブ有数の巨大ホテル「ウオーター・フロント」が見える

女性が仕事

バランガイ・ルスは、貧困地域の住民が自分たちの手で社会・経済的な状況の改善に取り組む「コミュニティー開発」のモデルとして知られています。住民組織やNGOが何十もあり、活発に活動しています。

コミュニティー開発のシンボルとなる建物が、「バランガイ・ホール」と呼ばれる3階建ての多目的ホールです。1階には、受付と健康センターがあります。健康センターには医師、助産師、歯科医、看護師がそれぞれ1人ずつおり、12人のヘルスワーカーが常駐しています。彼らの給料は政府から支払われ、受診者の治療費もほぼ政府により支払われています。2階は事務所になっています。3階には100以上のいすがあり、ミーティングの場として、多くの住民組織が使っています。また、女性たちの生活協同組合活動の一環として、リサイクル・バッグ作りが行われています。

バランガイ・ルスには、コミュニティー開発の歴史があり、さまざまな活動が展開しています。それによって、他のスラムと比べると住環境はだいぶ改善されています。水、電気、ガスなどの供給があり、日常生活を送るのに不便なことはありません。子供に十分な教育を受けさせることにも力をいれています。そのためにも、安定した収入が必要であるとして、女性たちが自分たちで仕事を積極的に作り出しています。ジュースの空きパックを材料に、子供を持つ母親たちがミシンを使いひとつひとつ手作りで仕上げるリサイクル・バッグに加えて、お弁当の配達やネックレス作りなども行われています。


女性リーダーのニーダ・カブレラさん。スラムの女性たちが作ったフェア・トレード商品の説明をしている

経済格差も

もちろん、まだまだ改善しなくてはいけない点も多々あり、コミュニティー・リーダーのニーダ・カブレラさんも、「衛生や健康を保つことは、貧困を改善していくために重要なポイントだが、排水施設が整っていない」と言っていました。

50年の歳月を経て、バランガイ・ルスは大きく変化しています。周辺地域は、近代的なショッピングモールや高級ホテルが建設され、セブ市有数の商業エリアへと変貌を遂げました。その影響もあってか、バランガイ内部での経済格差が生じつつあるように感じました。

最後に、バランガイ・ルスの印象を記します。まず、ここはとても活気があるところです。子供たちは近くの広場でサッカーやバスケットボールをやっていて、大人たちは家の前で作った食べ物を売ったり、隣近所で仲良く集まっておしゃべりをしていました。私たちにもとても優しく、調査していることに関して詳しくわかりやすく説明してくれました。とても、あたたかい人たちでした。